

主よ、わたしたちにも祈りを教えてください

二〇一六年一月六日

バイブル・サービス

和田 美稚子

今日のバイブル・サービスでは、「祈る」ということについて考えたいと思います。

日常生活の中で、私たちはよく「ご健康を祈ります」、「ご成功を祈ります」、「ご無事を祈ります」というような挨拶の言葉を使います。それは誰に対して祈っているかあまりはっきり意識しませんが相手の幸せを期待する意味で、通常の挨拶の言葉として使っているように思います。

私たちが、毎週水曜日バイブル・サービスの時に皆で一緒に唱えている「主の祈り」にはそのような挨拶とは違って、深い意味があるので、それについて話したいと思います。その出典は、新約聖書の中の福音書にあります。

「福音書」というのは、イエス・キリストのご生涯とその教えが弟子たちによって記されたものです。福音書は四人の記者によって書かれたものですが、「主の祈り」について記しているのは、マタイとルカでその表現には少し相違があります。それぞれの箇所を読んでみましょう。(新共同訳)

「マタイによる福音書」(六章七節～一三節)

「また、あなたがたが祈るときは、異邦人のようにくどくと述べてはならない。異邦人は、言葉数が多ければ、聞き入れられると思いついでいる、彼らのまねをしてはならない。あなたがたの父は、願う前から、あなたがたに必要なものをご存じなのだ。だから、こう祈りなさい。『天におられるわたしたちの父よ、み名が崇められますように。み国が来ますように。み心が行われますように、天におけるように地の上にも。わたしに必要なたん糧を今日与えてください。わたしたちの負い目を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を赦しましたように。わたしたちを誘惑に遭わせず、悪い者から救ってください。』」

「ルカによる福音書」(一一章一節～四節)

イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。そこで、イエスは言われた。「祈るときにはこう言いなさい。『父よ、み名が崇められますように。み国が来ますように。わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。わたしたちの罪を赦して下さい、私たちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」

聖書の中には、度々イエスが一人で祈っておられたことが記されています。その様な機会に弟子のひとりイエスに「わたしたちに祈りを教えてください」と言いました。そこでイエスは「こう祈りなさい。」とおっしゃって丁寧に教えてくださいました。

先ず、祈る相手は「天におられるわたしたちの父」、お父様だということです。また「天におられる」、この「天」

主よ、わたしたちにも祈りを教えてください

とは、遠い雲の上の空のことではなく私たちの内にいらっしやるということ。十六世紀の教会博士といわれているアヴィラの聖テレジア（1515-1582）の著書、『完徳の道』という本の中には、次のような説明があります。

「永遠の父に向かってお話するにも、そのお側で楽しむためにも天にまで昇る必要はなく、大声で話すこともいらない。それほど近くにいらっしやるので小声で話しても聞いてくださる。探しに行く必要はない。孤独になって自分の内に現存なさる神様を見さえすれば良いのです。」

（アヴィラの聖テレジア『完徳の道』第二八章二）

これは、聖テレジアの文書の中にある言葉ですが、カトリック教会ではこれを大変重要視して私たちに伝えていきます。つまり、私たちが各自、静かに自分の心の中をみると、そこに「お父様」である神様がいらっしやる。そして神様がいらっしやるところが天国であり、「み国」であるということなのです。これは古代キリスト教の神学者、聖アウグスティヌス（354-430）も同じような事を言っています。アウグスティヌスは、どこに神の存在があるかと考え、悩んでいたときに、「神をいろいろな所に探した揚句、自分自身の中に見出した」と彼の有名な著書『告白』の中で述べています。この言葉は大変有名です。（聖アウグスティヌス『告白』十卷二十七）

「み名が聖とされますように」、名前というのはその人全体を示すので神様が尊敬されますように、大切にされますようにということ。み国がきますように。み旨が天に行われるとおり、地にも行われますように」「み旨」とは、神様のお望み、お考え。神様のお望みが天で行われるのは当然ですが、それが地上でも行われるためには、私たちがしなければならぬことがあります。

それについては次のマザーテレサ（1910-1997）の祈りをみると良く分かります。

皆さんがご存じのマザーテレサは、インドのコルカタで「死を待つ人の家」を作り、路上に倒れている人たちを運んで来て、最期の息を引き取るまで大切に介抱し、食べ物を与え、体を清潔にしてあげました。そして、地上で自分が生きていたことは意味があったという喜びと感謝の心をもって逝かれるよう準備して、多くの亡くなる人たちを見送っていた方です。

マザーテレサの祈り

「主よ、わたしをお使い下さい。」

主よ、今日一日、貧しい人や病んでいる人を助けるために、わたしの手をお望みでしたら、

今日わたしのこの手をお使い下さい。

主よ、今日一日、友を欲しがる人々を訪れるために、わたしの足をお望みでしたら、

今日わたしのこの足をお使い下さい。

主よ、今日一日、優しい言葉に飢えている人々と語り合うために、わたしの声をお望みでしたら、

今日わたしのこの声をお使いください。

主よ、今日一日、人は人であるという理由だけで、どんな人でも愛するために、

わたしの心をお望みでしたら、今日わたしのこの心をお使い下さい。

神様がお望みになることを今日、わたしがしなければならぬ、そうさせて下さい、という祈りです。神様がどんなにいつくしみ深い方であったとしても、望んでいらっしゃることを、今、私たちがそれを実行しないならば、目の前に居る人には伝わらないのです。つまり、神様の愛というのは、わたしの協力なしには、目に見える形には

主よ、わたしたちにも祈りを教えてください

ならない。だからわたしの心の中に神様の愛の囁きが聞こえたら是非直ちにそうしなければならぬ、そうすることによって神様の米国が広まっていき、目に見えない神様の愛が多くの人々に伝わることになるのです。私たちも神様の望んでいらっしゃることを悟ったらすぐに自分の体でそれを表して、神様のいつくしみ深い愛を伝えていくように努めましょう。

今日は「祈り」についても一つお話ししたいことがあります。それは私が実際に体験したことです。私は仙台に来る前に東京の白百合で教えていました。今の白百合女子大学がまだ短期大学だった頃で、一人の卒業生が三十代半ばくらいの若さで亡くなりました。その卒業生のクラスの人たちが、度々彼女を見舞いに行っていたそうで、亡くなってから数人の同級生が、亡くなった彼女のために追悼ミサをして、皆でお祈りしたいと言っていて私のところに訪ねて来ました。それで神父様をお願いして、修道院のチャペルで追悼ミサをして頂きました。私は、彼女のご主人さまを存じ上げてはいなかったのですが、手紙で事情をお知らせし、同級生たちが希望していることを伝えました。数日後に頂いたお返事には、ご都合で当日は参列出来ないというお詫びと同時に書いてありました。

「この度は、よしえのためにミサを執り行って頂ける由、重々有難く感謝申し上げます。よしえもさぞかし喜んでいられると思います。残念ながら当日、小生は上京しかねますが、失礼の段、お許しくださいませようお願いします。申し上げます。よしえは白百合を誇りにしておりました。同窓の方々のお便りを頂くと、いつも大喜びで、小生などにもお友達のお名前が今でもごく身近な人に思われてくるほどでした。(中略)療養中にも励ましのお便りを頂きましたこと改めて御礼申し上げます。有難うございました。私はキリスト教については、ほとんど無知であります。彼女が病床にカトリックの神父様に来て頂くことを求め、オーストラリア生まれの神父様と唱和して「天にましますわれらの父よ」と祈りを捧げておりました姿に、微かな驚きと何か胸打たれるものがありました。神父様が、

しゃべることもやや不自由になっている彼女に『よく覚えていて下さいましたね』と言いました。私は彼女と知り合ってから、旅行や家族とのドライブ、安産祈願、七五三、初詣などで、神社にお参りしていた彼女の姿をよく見て参りましたが、死の不安を抱いた病床で十字を切る彼女に、真の胸の奥底にあったものを初めて見る思いがいたしました。本当はミサこそが彼女の魂を休めることのできる真の葬送になるかもしれないという気もいたしております。皆様、お忙しい中をよしえのために祈り頂きまして有難うございます。(後略)」というお手紙を頂き、私は驚きました。短大での二年間、「主の祈り」を毎日一緒に唱えていましたが、卒業後、新しい家庭生活に入り、二人のお子さんを儲けられたわけですから、三十代半ばになっていたと思います。しかも、病の中「死」を目前にした彼女が「主の祈り」を最後まで神父様と一緒に唱えたということに感動しました。彼女は嫁いだ先の家庭で大切にしている習慣をきちんと守り、当然、朝はご仏壇にご飯を供えて、手を合わせていたに違いありません。しかし彼女の心の中には「すべてのものの父である神様」に対する尊敬と信頼があったのでしよう。学生時代に教わっただけではなく、彼女自身家庭生活に入ってから毎日唱えていたのだと思います。同級生たちも度々お見舞いに行き、手紙を書いて励ましたり、亡くなられたことを知らせに来て、「一緒にお祈りしましょう」と集まったことも本当に「白百合生」らしいと嬉しく思いました。

皆さんも、学生時代に「白百合の良さ」をしっかり身につけて卒業して下さい。「祈り」というのは一つの宗教に限られたものではなく、創られた全てのものの父である慈しみ深い神様に向かう心からの叫びなのです。

(本学名誉教授)

主よ、わたしたちにも祈りを教えてください